

生活保護による生活再建とサポーターハウスの役割

《サポーターハウス居住者調査の概要》

釜ヶ崎地域では、長引く不況と高齢化のために野宿生活を余儀なくされている人々が増加し、まちの活気が失われつつあります。すべての住民が健康で安全に暮らせる活気あるまちづくりを進めるためには、まずホームレス状態にある人々に対して安定した居住を保障することが必要です。「サポーターハウス」は、このような理念に基づいてまちづくりを推進している市民団体「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」の活動から生まれた、簡易宿泊所転用型アパートです。

「サポーターハウス」には、ホームレス状態にある人々の生活再建をするためにさまざまな工夫が凝らされています。まず、野宿状態からでも利用ができるように、敷金や保証人を不要とし、生活保護等が利用できるまでの経済状況に配慮して家賃の後払いを認めています。また、廊下や浴室の一部に手すりを設置したり洋式トイレを設けたりするなど、入居者の高齢化に対応した建物の整備を行なっています。さらに、職員が24時間常駐し、入居者それぞれが二度と野宿生活に戻らず安定した地域生活を行なっていけるように、必要に応じて相談や援助を行っています。生活相談および生活支援の内容は、入居者が抱えているさまざまな個人的事情によって異なりますが、たとえば、生活保護申請手続きの介助、金銭管理、安否確認、居室や共用部分の清掃、サラ金問題の相談、服薬時間の管理や見守り、入居者同士のトラブルの仲裁、入退院手続きの介助や入院中の見舞い、介護保険の相談などがあります。入居者同士の交流を促し、また入居者と地域社会との接点をつくるために、1階には共同リビングが備えられ、休憩・談話、サークルやイベント活動などに利用できるようになっています。

平成12年6月に第1号が開業したのを皮切りに、2003年4月までに6人の経営者によって9軒の「サポーターハウス」が運営され、約1,000人が生活保護を受給しながらここで生活を行なっています。

本書は、「サポーターハウス」の入居者台帳およびアンケート調査をもとに、入居者の特徴や意識をまとめたものです。「サポーターハウス」の役割を検証し、釜ヶ崎地域の住まい・まちづくりの一助として利用していただければ幸いです。

釜ヶ崎のまち再生フォーラム
釜ヶ崎サポーターハウス連絡協議会（仮称）

2003（平成15）年5月

調査概要

< 調査課題と方法 >

本調査は、居住支援研究委員会が、釜ヶ崎居住 COM や釜ヶ崎のまち再生フォーラムの協力を得て実施したものです。調査対象は、初期に開業した 6 軒の「サポータティブハウス」の入居者です。調査方法は、まず、入居者台帳によって居住者の属性を把握した後、アンケート調査とインタビュー調査を行なっています。インタビュー調査の結果については、本書では省略しています。入居者台帳は、2002(平成 14)年 3 月末現在のものを使用し(入居者数 670 人) また、アンケート調査は 2002(平成 14)年 3 月から 4 月にかけて実施しました(配布: 645 人、回収: 516 人、回収率: 80.0%)。調査には、大阪府立大学、大阪市立大学、京都大学、お茶の水大学、大阪大学などの教員、大学院生、学生、OB・OG にもお手伝いいただきました。

< 調査対象 >



マンション・アプリシェイト:

2000(平成 12)年 6 月開設

入居者数 117 人

シニアハウス・陽だまり:

2000(平成 12)年 9 月開設

入居者数 99 人

ウェルフェアハウス・おはな:

2000(平成 12)年 11 月開設

入居者数 98 人

マンション・フレンド:

2000(平成 12)年 12 月開設

入居者数 126 人

マンション・イノセンス:

2001(平成 13)年 6 月開設

入居者数 129 人

メゾン・ド・ヴュー・コスモ:

2001(平成 13)年 12 月開設

入居者数 101 人

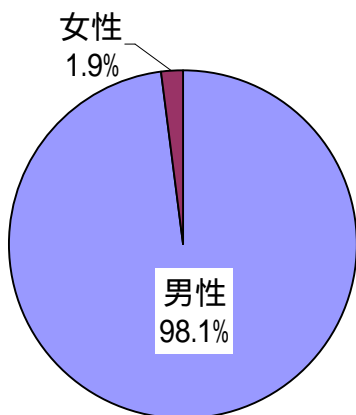
(入居者数は、2002(平成 14)年
3 月末現在)

、居者の特徴(1)

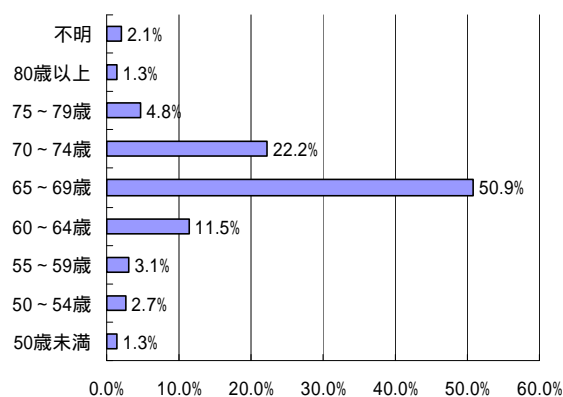
入居者のほとんどは単身の男性で、65歳以上の高齢者が約8割を占めています。しかし、後期高齢者（75歳以上）は少数です。

障害者手帳を所有している人は約1割、要介護認定を受けている人は40人以上で、高齢化とともに介護問題が顕在化していくことが予想されます。

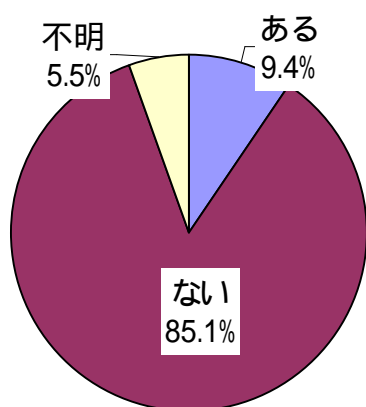
性別



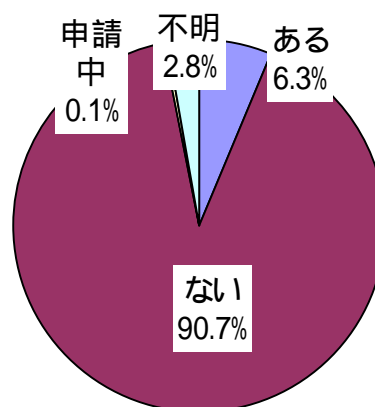
年齢



障害者手帳の有無



要介護認定の有無



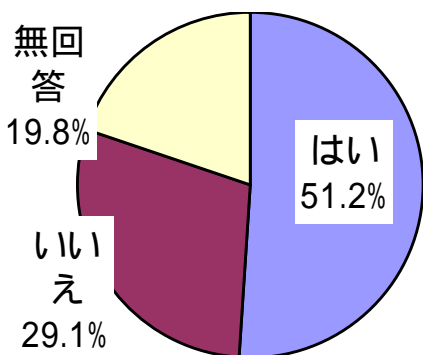
(入居者台帳より作成)

入居者の特徴（2）

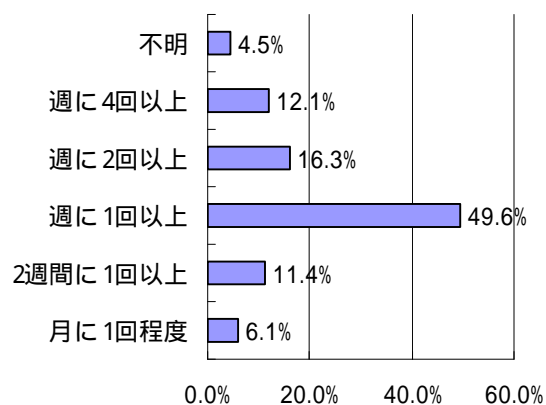
入居者の約半数は通院しており、現在の健康状態については、4人に1人が「やや悪い」または「とても悪い」と回答しています。

食生活については、入居者の約1割が規則正しい食事を取ることができていません。

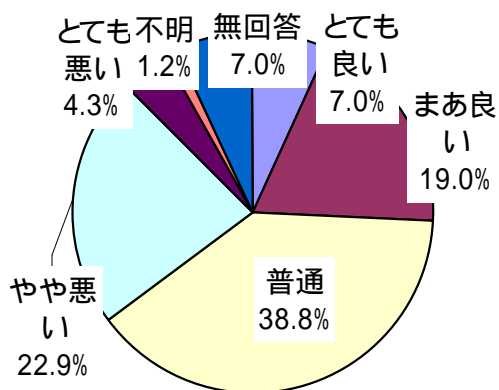
現在、病院に通っていますか？



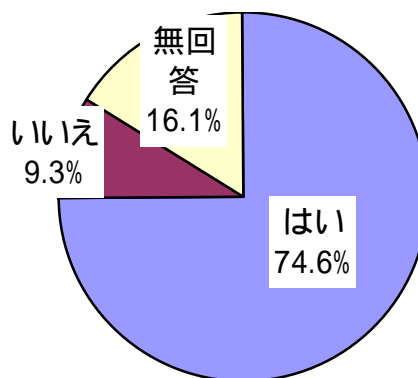
通院回数



現在の健康状態はどうか？



食事は規則正しく取っていますか？



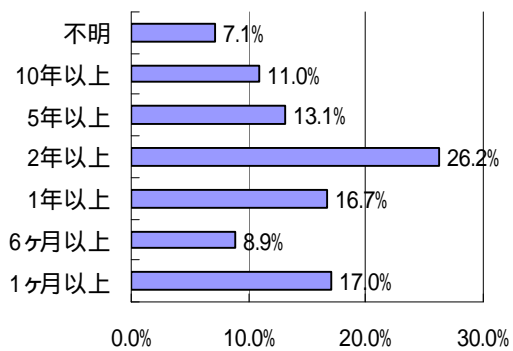
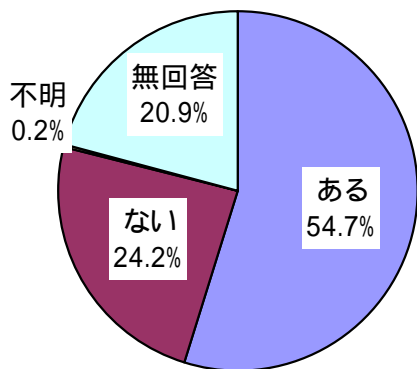
入居にいたる過程（入居前の状況）

入居者の半数以上が野宿生活を経験しています。その半数は、ここ数年の間に野宿状態に陥った人々です。

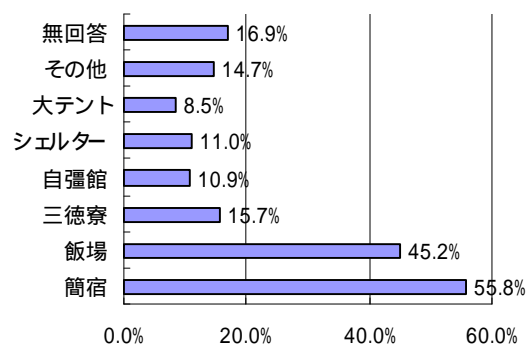
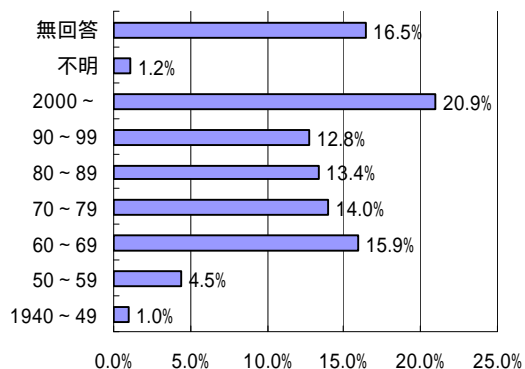
入居者と釜ヶ崎との関係は深く、サポーターハウスが開設する以前から釜ヶ崎に来ている人が約8割を占めます。

簡易宿泊所や飯場で生活したことがある人が多く、また4人に1人は三徳寮や自彊館などの施設を利用したことがあると回答しています。

野宿をしていたことがありますか？ 野宿期間



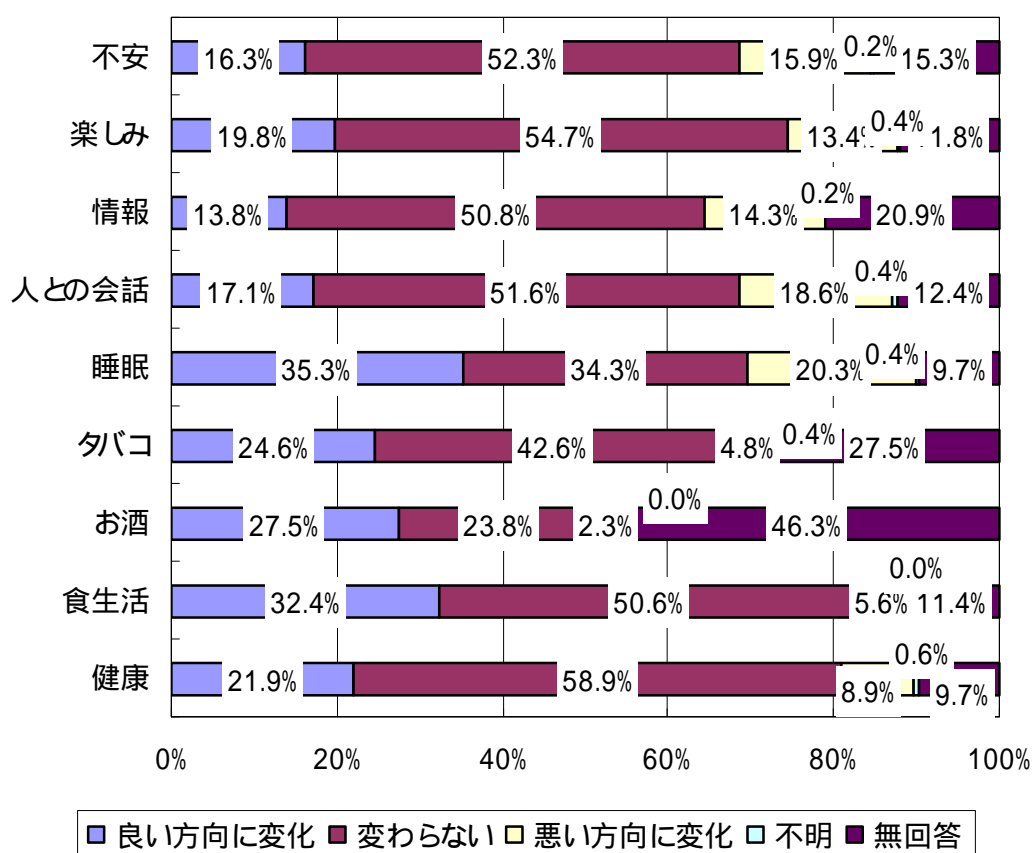
初めて釜ヶ崎に来たのはいつ？ これまでに生活したことがある場所は？



入居後の生活（１）

サポートハウスで暮らしてからの生活の変化については、食生活や健康などで改善傾向が見られます。また、飲酒量や喫煙量が減ったという回答も多く見られました。

ここで暮らしてからのあなたの健康や生活の変化は？

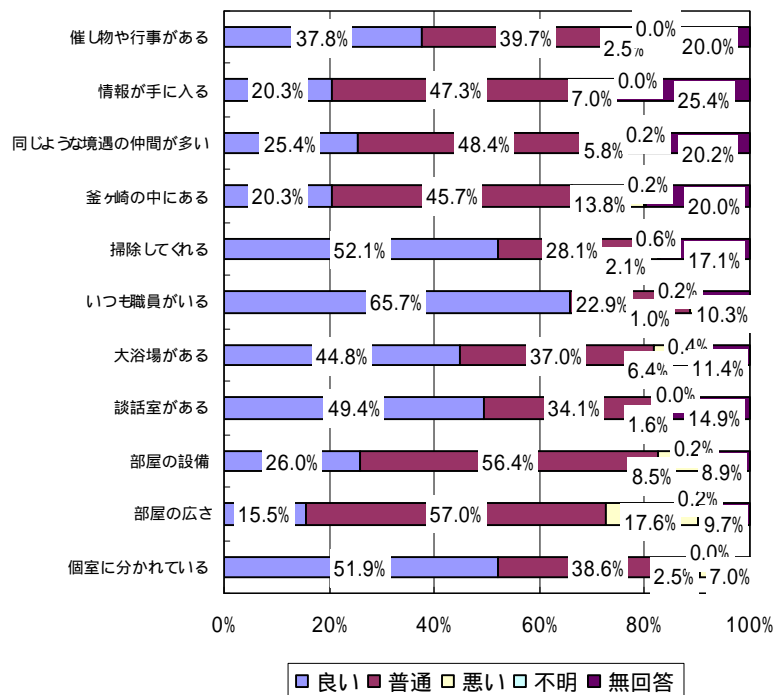


入居後の生活（２）

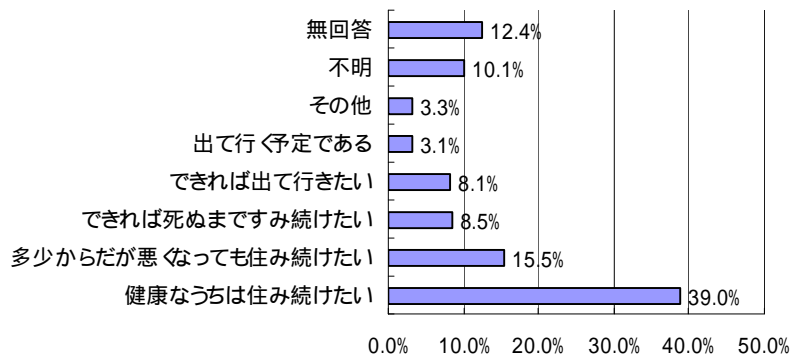
住み心地については、「いつも職員がいる」「掃除してくれる」「個室に分かれている」「談話室がある」という点を評価している人が多いです。一方、「部屋の広さ」は、他項目に比べて相対的に評価が低いようです。

結果として、サポータティブハウスに「健康なうちは住み続けたい」と思っている人が約４割います。また４人に１人は「多少からだが悪くなっても」「できれば死ぬまで」と強い永住希望を持っています。「できれば出て行きたい」「出て行く予定である」という回答も１割強ありました。

サポータティブハウスの住み心地は？



サポータティブハウスにこれからもずっと住み続けたいですか？



まとめ

サポーターハウスの役割

サポーターハウスの入居者の多くは、簡易宿泊所や飯場で生活した経験がある、釜ヶ崎になじみの深い方々です。また、半数以上の人野宿生活を経験しています。加齢や野宿生活などから健康状態を害している人が少なくありません。サポーターハウスはこのような人々に安定した居所を提供し、必要な人的援助を行うことで、健康を回復し生活を再建することに役立っていることがわかりました。また、心身に障害のある人や要介護状態の人など、これまでは病院や施設でしか生活できなかった人にも、住みなれた地域で生活する機会を与えています。

特に、サポーターハウスの特徴の一つである「いつも職員がいる」ことや「談話室がある」ことに対しては入居者の評価が高く、ホームレスの人々の生活再建と社会再参加の過程で、人的サポートを備えた居住施設である「サポーターハウス」の役割は大きいといえます。

今後の課題

単身高齢世帯が多いサポーターハウスでは、要介護問題は現在もまた将来的にも深刻な課題の一つです。特に、アルコールによる精神疾患や痴呆は大きな問題となってきました。また、比較的健康的な入居者にも、精神的不安やひきこもりなどの症状が見られます。要介護問題への対応や、入居者への精神的ケアなどのサポートシステムを、早急に整える必要があります。

部屋の広さや設備など、建物面の整備も大きな課題です。これについては、資金面などの条件を含めて、検討が必要です。当面は、地域の他資源（民間賃貸住宅や高齢者施設、医療施設など）を活用し、地域住民や諸団体との連携を進めながら、入居者が生活を再建し地域に住み続けられるよう支援していくことが望まれます。

< 問合せ先 >

釜ヶ崎のまち再生フォーラム：西成区太子 2-2-16 釜ヶ崎 EGG s（釜ヶ崎まちづくり合同事務所）

TEL 06-6633-0581 FAX 06-6641-0297